

第5章 出土骨角器・貝製品の分析

第1節 骨角器・貝製品の概要

本調査で検討する骨角器と貝製品は65点に及ぶ。器種は、骨鏃など狩猟具、ヤスといった漁労具、骨針、刺突具といった工具、髪針、垂飾、勾玉などの装飾品、漆塗貝製品など13種にわたる。内訳は骨鏃2点、ヤス3点、組み合わせ式ヤス7点、ヤス状刺突具8点、刺突具9点、弭形角製品1点、髪針6点、垂飾6点、管状加工垂飾3点、札状加工垂飾1点、腰飾2点、勾玉3点、漆塗貝製品4点、未成品・廃材9点、器種不明2点で、ヤスなどの刺突具類が多い。なお、このなかには破損や劣化により器種認定が推定に留まるものもあり、その場合には疑問符を付した。

東区37点、西区24点で、東区の出土数が多い。出土層序は低湿地にあたる東区13層～25層、西区Vb～VIIa層でおおよそ晩期後半の大洞C2～大洞A2式期に属す。内訳は東区10～14層1点、東区15～26層34点、西区V層11点、西区VI層12点、西区VII層1点で大洞C2式期の東区15～26層、および大洞A1・2式期の西区V・VI層がまとまっている。注記が不鮮明なため所属層位不明なものが若干あるが、台帳の日付や順序から上記の層序と同じで大洞C2～A2式期に属すとみられる。以下器種別に述べる。

第2節 骨鏃 (図70-1・2) (図版63)

着柄のための茎をもち、茎とは反対側の先端部を尖らせるもの。2点ある。いずれも東区Iグリッド、23層で大洞C2式に属す。長さ5～6cm、幅1cm未満で細身である。1は鹿角製で、器体部と茎部が明確に分かれ、段をなす。断面は円形である。2は器体部と茎部の境が括れるものである。器体部は菱形で茎部が器体部より長い。断面は扁平である。被熱による黒色部がある。全面が劣化し、研磨痕は不明瞭である。

第3節 ヤス (図70-3・4、図73-4) (図版63・66)

外形がまっすぐで、片側または両側に複数の逆刺があるもの。3点ある。なお斜行着柄加工のあるものは組み合わせ式ヤス、器体部と基部が不明瞭で逆刺のないものをヤス状刺突具として区別する。東区17層、同25層、不明、各1点で大洞C2式期に属す。鹿角製である。図70-3・4は、いずれも長さ15cmほどの大型品で逆刺は両側に10程度ある。しかしその位置はランダムで、浅く、抉る程度である。図73-4も同類の先端付近とみられるが劣化が激しく、逆刺は劣化により欠損する。

第4節 組み合わせ式ヤス (図70-5～11) (図版63)

先端の向きに対して、基部が斜めに切られており(斜行着柄加工)、柄に装着した際に外側に分岐したような形状になるもの。7点ある。ほとんどが東区15～26層で、大洞C2式期に属す。東区H～Lグリッドから検出した。逆刺付2点と、逆刺無5点がある。逆刺付は10cmを超える。図70-5・6は逆刺付である。逆刺は両側にある。鹿角製で斜行着柄加工された平坦な基部にアスファルトが付着する(図版参照)。その反対側には、紐を結びつけるための挟りがある。5は完形品、6は先端を欠く。

図70-7～11は逆刺無である。これらのうち、図70-7～9は、長さ6～8cm、径0.5～0.7cmで断面が円形で直線状である。挟み込む構造でないため、これ自体が組み合わせ式ヤスの器体に接合して、その逆刺部として機能していたとみられる。全面が研磨され、黒色物が付着する。拡大観察ではアスファルトと同じ色、質感であることから(図版参照)、器体と接合するためにアスファルトが塗られて

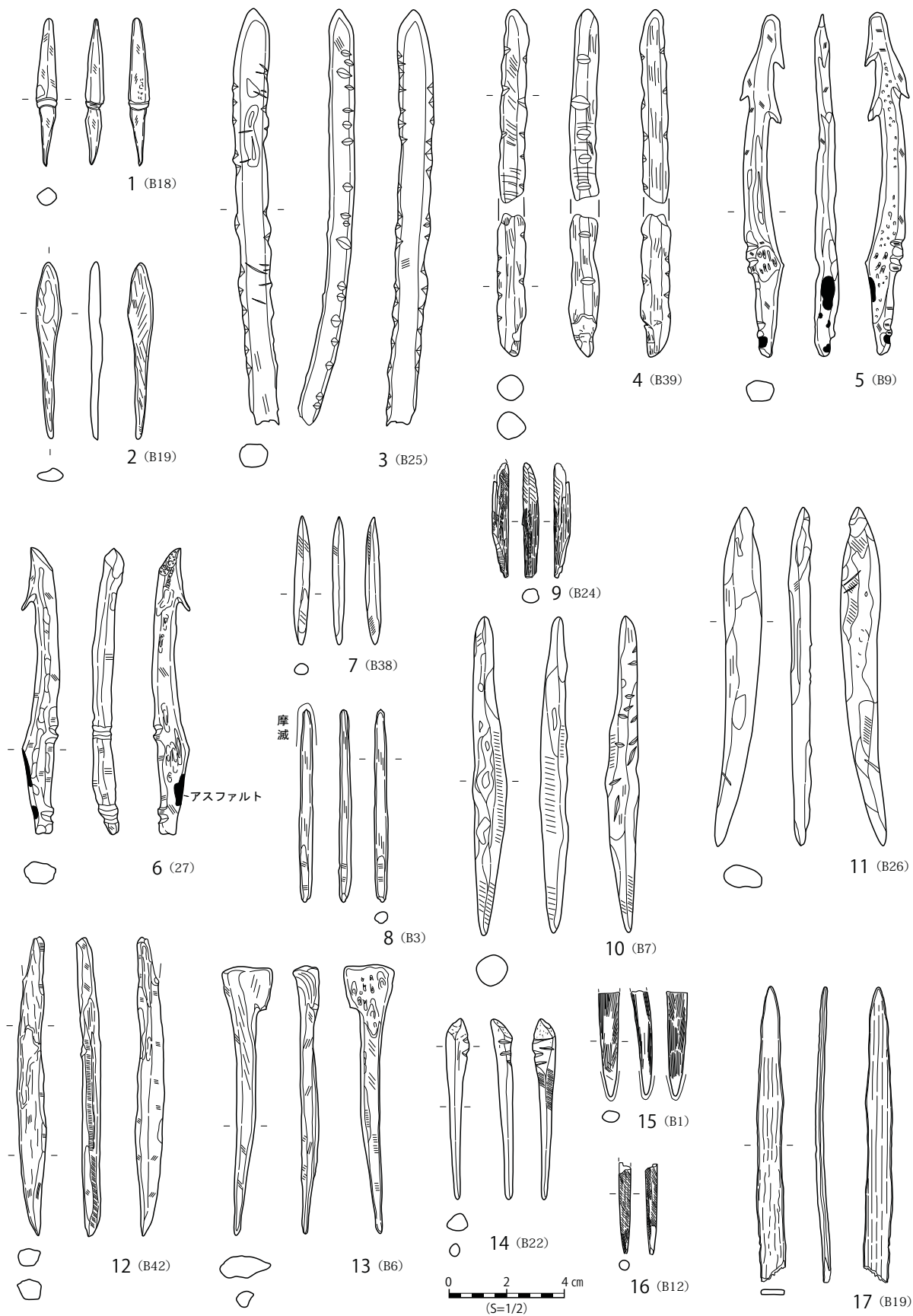


図 70 山王冢遺跡骨角器 1

いたと推測される。7は片側に刃をつけ先端を尖らせる。8の先端は磨滅する。10・11は長さ10cm、幅1cmを超える。劣化により基部などが不明瞭だが、全体形が湾曲し平坦な面があることから逆刺と接合する組み合せ式ヤスの器体と推定される。鹿角製である。

第5節 ヤス状刺突具 (図70-12、図72-1~6、図73-5) (図版63・65・66)

刺突部があるものの、逆刺がなく、かつ茎部と基部に明確な区別ないものをまとめた。このなかには本来ヤスであったものの欠損や劣化により器種判定が難しかったものも含む。東区1点、西区6点、層区不明1点、計8点ある。層位は東区25層1点、西区V・VI層6点で、大洞C2~大洞A2式期に属す。鹿角製あるいはシカ中手・中足骨製である。全て長さ5cm以上である。図70-12は長さ10cmを超える。シカ中手・中足骨製である。図72-1・2・4は大きさが長さ8cmほど、幅1cm未満で、断面が扁平である。シカ中手・中足骨製である。端部の一方を欠く。先端を研磨し鋭利にする。3は骨鏃の可能性もあるが、鏃としては先端が丸いため刺突具とした。鹿角製である。5・6はいずれも劣化、変形するものの、長さ10cm以上、断面円形の棒状の刺突具と推定される。劣化により研磨痕は観察しにくい。図73-5は破片であるが、図70-12と同じ形状で長さ10cmを超えるとみられる。

第6節 刺突具 (図70-13~17、図72-7・8、図73-6・7) (図版63・65・66)

器体の一方を尖らせ、刺突機能を有する。もう一方は着柄加工や、穿孔、装飾がなく自然面を残す。このなかにはもともと骨針や髪針であったものの欠損や劣化により器種判定が難しかったものも含む。東区4点、西区2点、層区不明2点の計8点ある。層序は東区15~26層3点、西区V・VI層各1点、不明3点で、大洞C2~A2式期に属す。細身で断面円形、直線状のもの(6点)と、柳葉形で断面扁平なもの、錐状の先端部があるもの、シカ尺骨製で太身のもの、各1点の4種に分けられる。

図70-13~17は東区出土である。図70-13~16、図72-7・8は細身で断面円形、直線状のものである。図70-13・14は完形品でその他は先端部のみである。13は長さ9.2cmで、刺突部の長さ7.5cm、径0.5cmである。14は長さ6.2cm、刺突部の長さ4cm、径0.4cmで基部に比べ長い刺突部を持つのが特徴である。13の基部は自然面を残すが、14には刻目がある。図70-15は鹿角などの先端部を利用して作られたもので縦方向の研磨痕を残す。図70-16は全面を丁寧に研磨され、断面は正円である。被熱により変色する。図70-17は柳葉形で断面扁平である。東区18層出土で大洞C2式期に属す。長さ10cm以上ある。哺乳類の肋骨製とみられる。図72-7・8は西区出土である。図72-7・8は細身で断面円形、直線状のもので先端側5cmほどが残存する。7は西区V層、8は西区VI層出土である。7は全体が磨滅する。8は管骨を割いた後、先端を研磨し刺突部を作り出す。図73-6・7は層位不明である。図73-6は錐状の先端部があるもの、図73-7はシカ尺骨製で太身のものに該当する。6は鹿角片の端の両側が抉れ、その先端が細く突き出し錐状をなす。錐部は径1.3cmで磨滅し線状痕が観察できる。7はシカ左尺骨の遠位側を尖らし、近位端側を握り部とする。近位端側の片側には傷状の痕跡がある(図版参照)。

第7節 弭形角製品 (図71-1) (図版64)

鹿角の枝部・角幹部を輪切りあるいは枝部の先をそのまま用い、その内部のスポンジ質をくり抜いて貫通させるか、ソケット状にする。短型で装飾はない。図71-1は鹿角先端部の加工品である。下側に溝を巡らせる。下面は凹ませてソケット状にする。表面は磨滅して光沢がある。

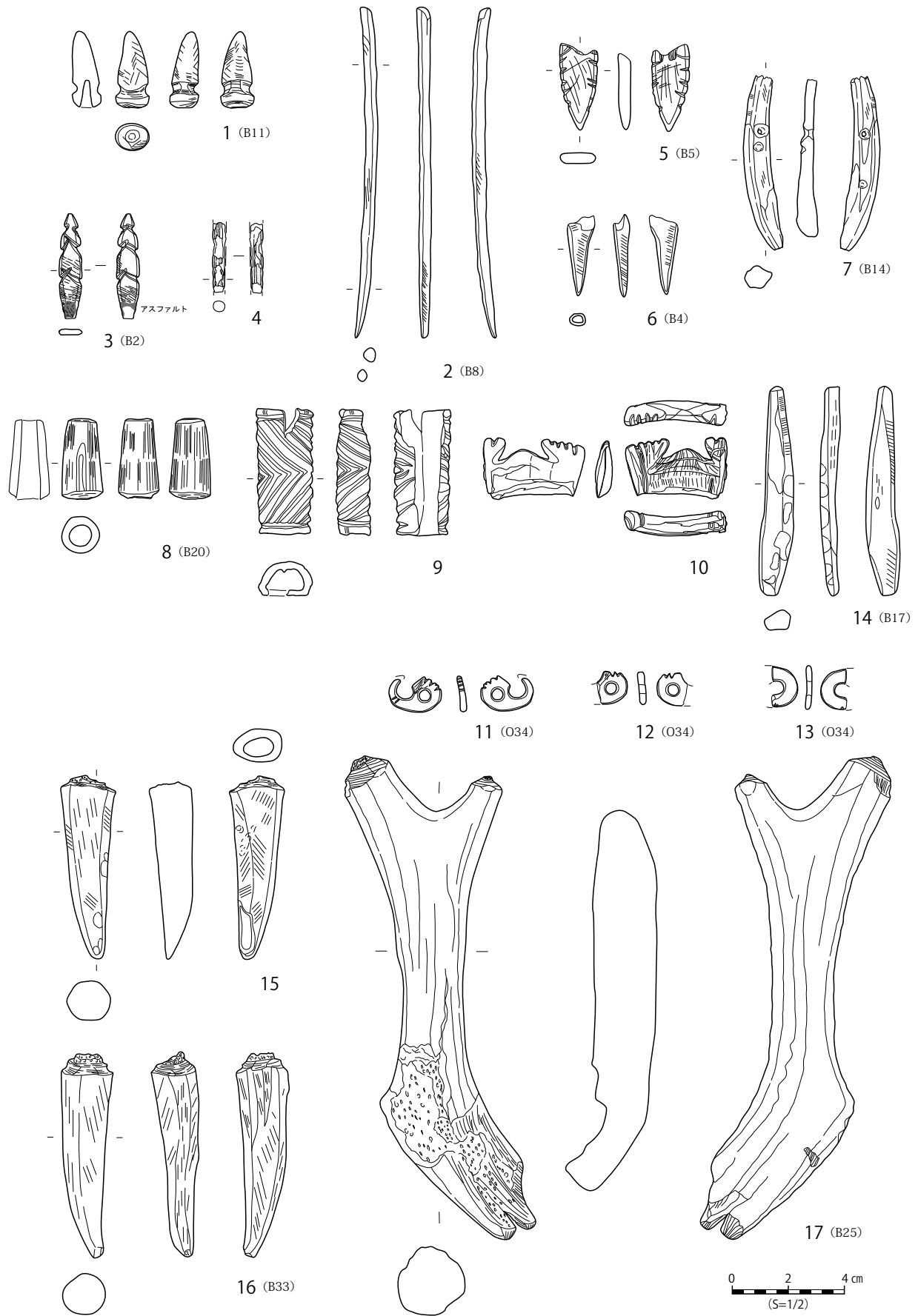


図 71 山王冢遺跡骨角器 2

第8節 髪針 (図71-2~4、図72-9~11) (巻頭写真3、図版64・65)

全体が細長い針のようなかたちになっており、針先ではない一方に装飾がみられる例や赤漆が残る例がある。東区4点、西区2点の計6点ある。東区10~14層1点、東区15~26層2点、西区V層1点、西区VI層2点で大洞C2~A2式期に属す。加飾部がないタイプと加飾部があるタイプ、いわゆるかんざしに二分される。加飾部がないタイプは1点、加飾部があるタイプは4点ある。加飾部は個々に特徴があり同じものはない。

図71-2・3は大洞C2式期に属す東区15~26層出土である。2は長さ11.8cm、径0.5cmと細く長い。針部のみで骨の形状から加飾部がないタイプとみられる。赤漆が微量に付着する。3は針部を欠くとみられる加飾部である。加飾部は沈刻によって両側に3つの抉りを入れる。欠損部にアスファルトが付着し(図版64参照)、接着剤として利用したとみられる。ただし本資料はその形状から両側の抉りを逆刺とみることもでき、ヤスの可能性もある。図71-4は東区13層出土で、大洞A式期に属すとみられる。径0.4cmの直線状で針部の一部とみられる。表面は光沢を帯びるほど磨滅する。赤漆が付着する。

図72-9~11は西区V・VI層出土である。9は先端を一部欠くものの全体形がうかがえる。長さ12.1cm分が残る。シカ中手・中足骨製とみられる。加飾部は骨の形を利用し抉りを入れる。10は針部の6cmほどが残る。径0.5cmで赤漆が付着する。

11は加飾部が大きく立体的な優品である。西区VI層検出である。長さ8.0cmが残り、加飾部は最大径3.9cmを測る。全面が赤漆塗である。シカ肩甲骨製であり、関節から外側縁の一部を残し、関節窩周囲を加飾部とする。加飾部の上縁に刻みを巡らし、その下に4つの孔を入れる。孔は貫通、未貫通各2ヶ所ある。この部位を装飾品として用いるのは珍しい。

第9節 垂飾 (図71-5~7、図72-12・13・17) (図版64・65)

装飾的な効果を高めるために身体につけて吊り下げる構造のあるものである。このうち、環状、札状など特徴的な形は別記する。なお、欠損により全体形が不明で他器種の可能性がある場合には器種名に疑問符を付した。計6点ある。東区3点、西区3点である。東区は全て15~23層で大洞C2式期に属す。西区はV層1点、VII層1点で大洞C2~A2式期に属す。鹿角またはイノシシ下顎歯製がほとんどである。図71-5・6は先端が尖り半分以上を欠くため、刺突具など他器種の可能性がある。5は鹿角製である。5・6とも断面扁平で5には両側に刻目がある。図71-7、図72-13はイノシシ下顎切歯製の垂飾である。いずれも右第1切歯が用いられる。長さ6cm、幅1cmほどである。図71-7は貫通孔が1ヶ所、図72-13は2ヶ所ある。図71-7は未貫通の孔が表裏各1ヶ所ある。図72-13の2ヶ所の孔には黒色物が充填され塞がれる。図72-12は歯牙である。片面(図左)は自然面を残すが、もう一方の面は水平に研磨した面が一部残存する。穿孔があると推測される基部を欠くが、垂飾の可能性が高いと判断した。図72-17は、シカの手根骨に穿孔したものである。

第10節 管状加工垂飾 (図71-8・9、図72-14) (図版64・65)

垂飾のうち、鹿角や環状骨を輪切りにして管のように加工される。径に比べて全長が長いものとした。3点ある。いずれも東区15~26層とみられ、大洞C2式期に属す。図71-8は輪切りにした角枝部を素材とし、内部の海绵質をくり抜いて貫通させる。長さ2.7cm、最大径1.4cmである。装飾はないものの、表面には縦方向の溝状の凹みが1条あるが、加工か自然か判然としない。

図71-9は装飾加工がある好例である。長さ4.3cm、最大径1.8cmで、素材は断面形からシカ中手・中足骨の遠位部と判断される。表面には矢羽状の沈刻が巡る。他の骨角器にくらべ白色化しており、被

熱している可能性がある。図 71-14 は西区Ⅵ層で大洞A1 式期に属す。輪切りにした骨を素材とし、内面をくり抜いて貫通させる。長さ 1.9 cm、最大径 1.1 cm である。装飾はなく、表面は磨滅して光沢がある。

第 11 節 札状加工製品 (図 71-10) (図版 64)

素材を扁平に切断加工した後、表面に彫刻を施した札状の製品である。1 点ある。東区 15 層出土で大洞C2 式期に属す。長さ 3.6 cm、幅 2 cm、厚さ 0.7 cm で、素材はイノシシ雄下顎犬歯で、舌側エナメル質の一部を切断して用いている。上辺を三叉状に抉り、残った上辺に連続的に刻目を入れる。

第 12 節 勾玉 (図 71-11~13) (図版 64)

歯牙や貝殻の一部を切り出して勾玉状の製品にする。3 点ある。全て東区 10 層出土で、図版から石製玉類とともに集中して出土したことが分かる。エナメル質を素材としており、幅の広さからイノシシ雄下顎犬歯を使用している可能性が高い。図 71-11 はほぼ完形で長さ 1.9 cm、幅 1.2 cm、厚さ 0.3 cm を測る。2 cm に満たない小型品である。製作手順は素材を楕円形に切り出す。次に上下 2ヶ所に穿孔、その際、一方の孔径をやや大きくする。穿孔後、大きい方の穿孔に切り込みを入れ尾部と抉り部を作り出す。頂部には刻目を入れ、装飾する。図 71-12・13 は接合しないものの同一個体とみられる。復元される大きさや製作手順は図 71-11 と同じである。

第 13 節 腰飾 (図 72-15・16) (図版 65)

鹿角の叉状部を利用した有孔の叉状製品で、彫刻がある例もある。2 点ある。西区Ⅵ層出土で大洞A1 式期に属す。いずれも鹿角を素材とする。図 72-15 は長さ 2.4 cm、幅 1.5 cm で全面に赤漆が塗られる。穿孔部を上にした場合、2 本の軸が直角に交わる。

図 72-16 は彫刻がある好例である。長さ 9.1 cm、幅 1.3 cm である。基本形は図 72-15 と同じで、穿孔部を上にした場合、2 本の軸が直角に交わる。断面は海绵質が除かれ、U 字形を呈す。文様は端部と交叉部に円文を配し、一方の軸に連続弧文、もう一方に入組三叉文を挿入する。彫刻文様の内面には漆とみられる物質が残存する。

第 14 節 未成品・廃材 (図 71-14~17、図 73-1~3) (図版 64・66)

製品の製作途中あるいは製作過程で除かれた加工痕を残す資料である。9 点中 7 点図示した。東区 5 点、西区 4 点を見出した。東区資料は全て 15~26 層で大洞C2 式期に属す。西区資料はⅥ層で大洞A1 式期に属す。図 73-1~3 以外は鹿角を素材とする。東区の図 71-14 は長さ 7.4 cm、幅 1.2 cm の短冊状に分割したものである。全面を研磨する。特に基部を面取りするように研磨されており(図版参照)、ヤスあるいは組合式ヤスの未成品とみられる。図 71-12・13 は鹿角先端、逆に図 71-14 は角の第 2~第 3 分岐に当たり、いずれも端部に切断痕跡が残る。角幹部を取り出した残部とみられる。図 71-14 と図版 64 にみられるように切断痕は、複数の面が巡り、面には擦切痕が残る。石器で切り込みを入れて抉った後、折り取って素材を得ていたと推定される。西区の図 73-1 は上下端に横位の研磨痕が残る。骨製で、形状からイノシシ腓骨製の筥状製品の可能性があり、その場合は製品かもしれない。図 73-2 はイノシシ左尺骨製。長さ 11.9 cm で特に近位端が磨滅し、使用痕、ないしは握り部とするために成形している可能性がある。図 73-7 のような尺骨を用いた近位端側を握り部とする刺突具の未成品もしくは先端を欠損した製品とみられる。図 73-3 は骨製。先端が磨滅し刺突具の製作途中あるいは、この段階で刺突具として機能していたとみられる。

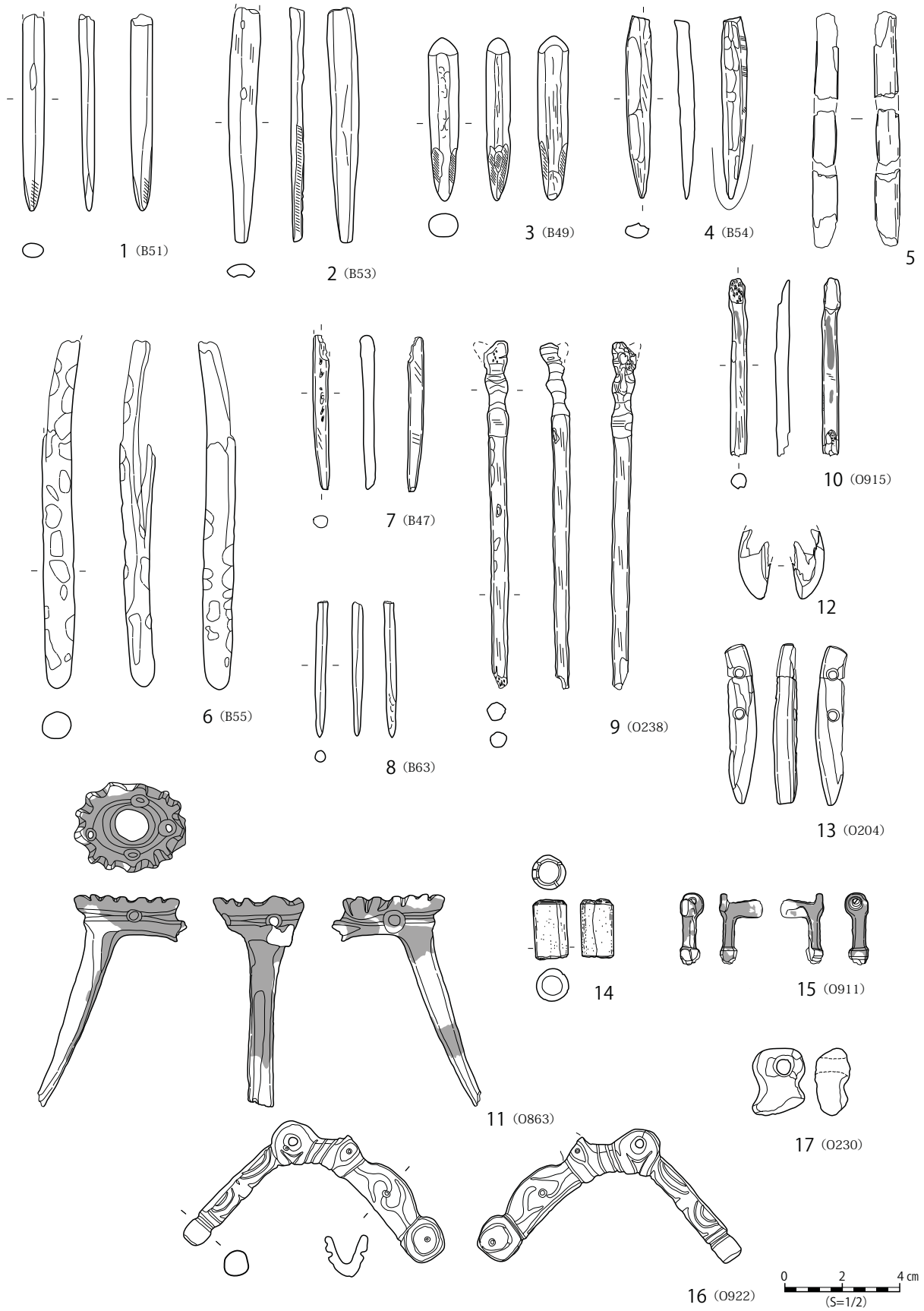
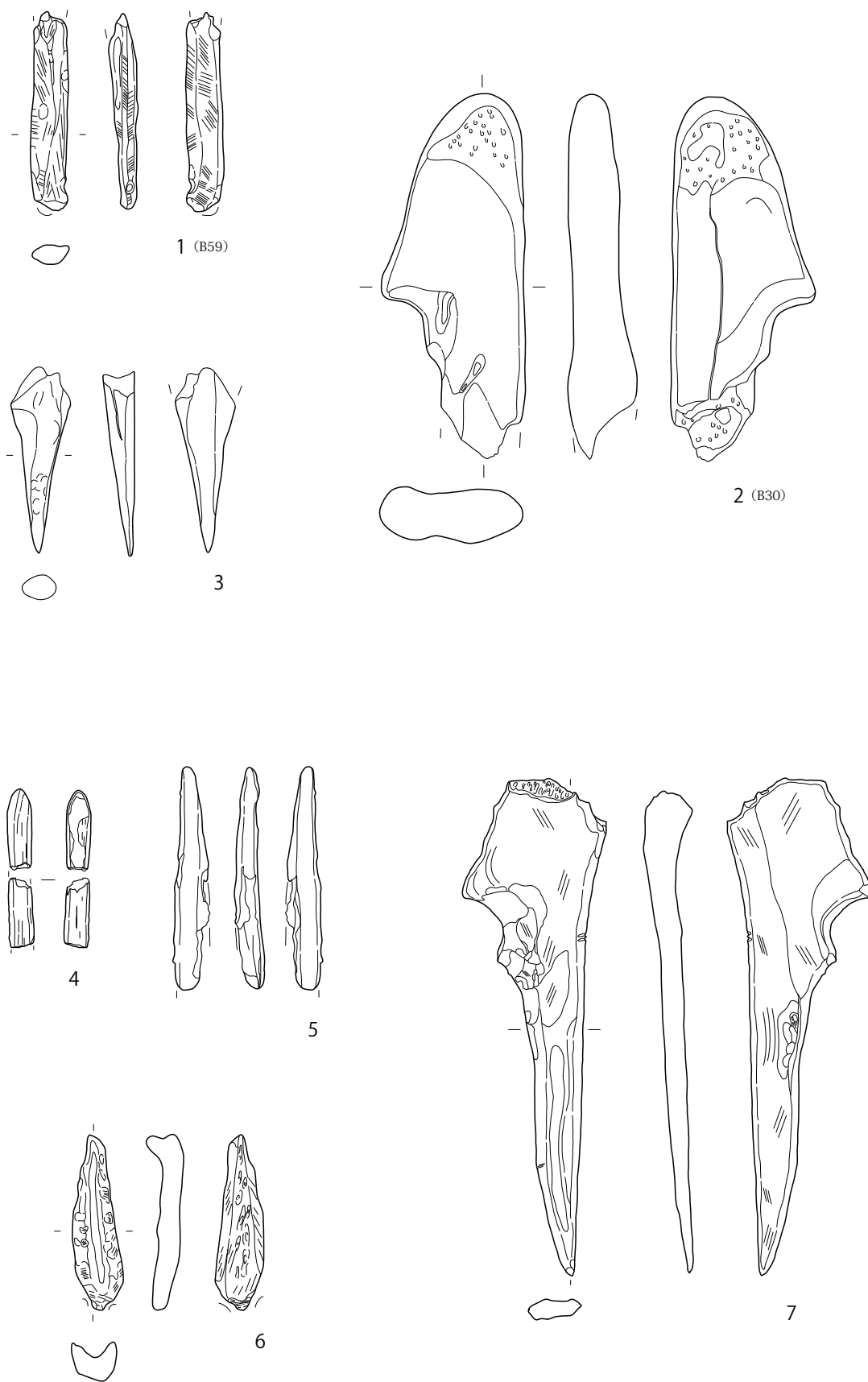


图 72 山王冢遺跡骨角器 3



0 2 4 cm
(S=1/2)

图 73 山王冢遺跡骨角器 4

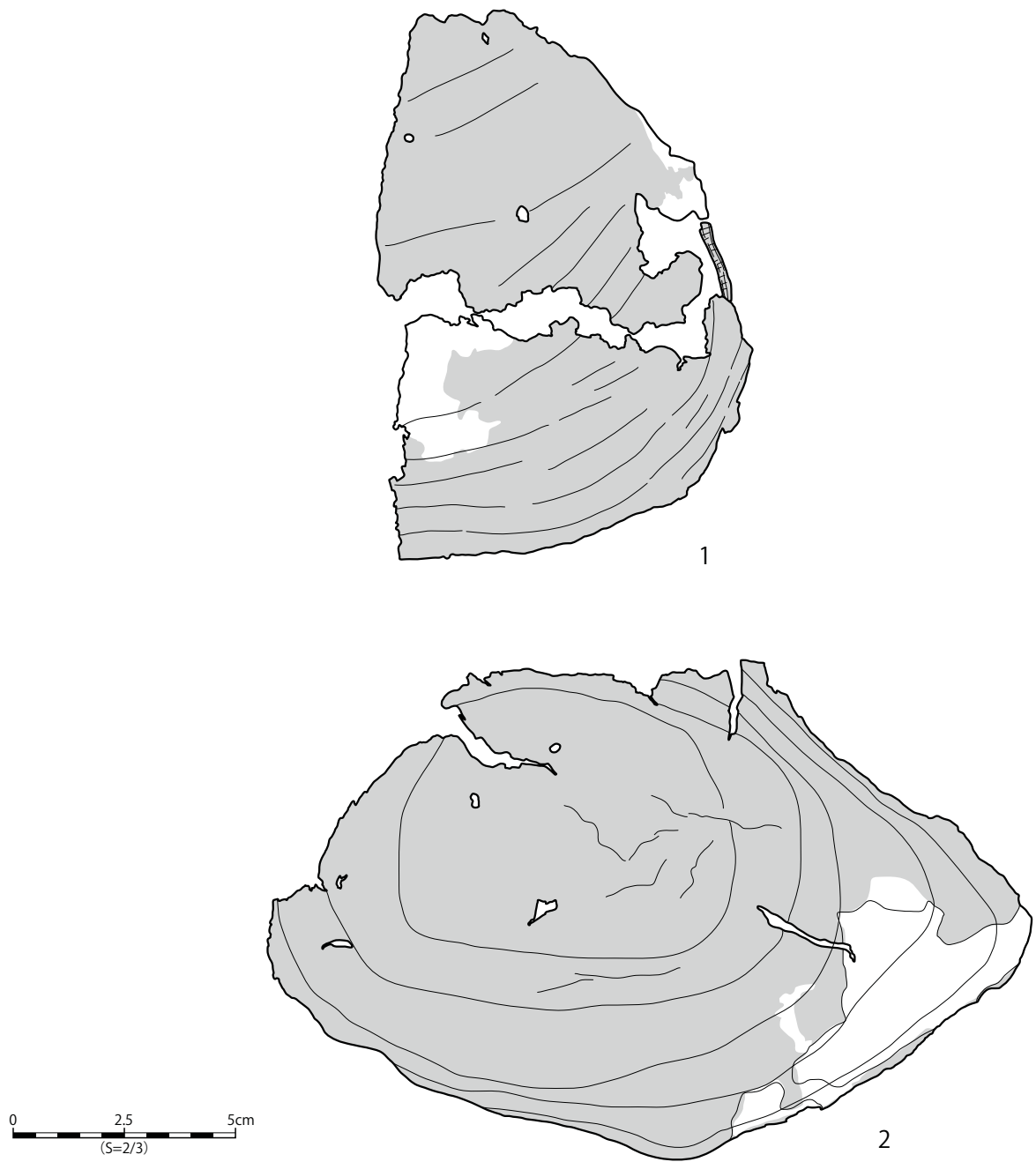
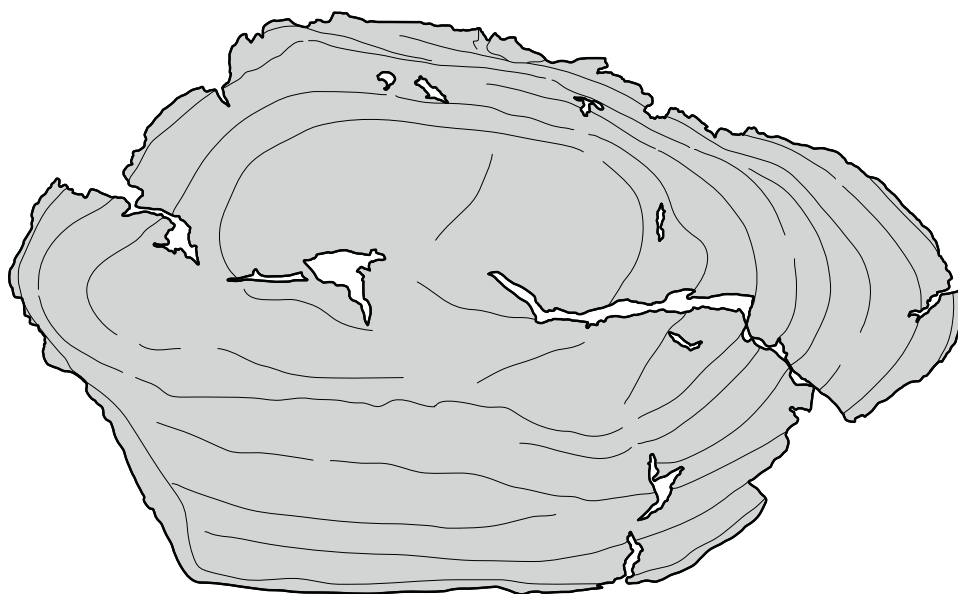
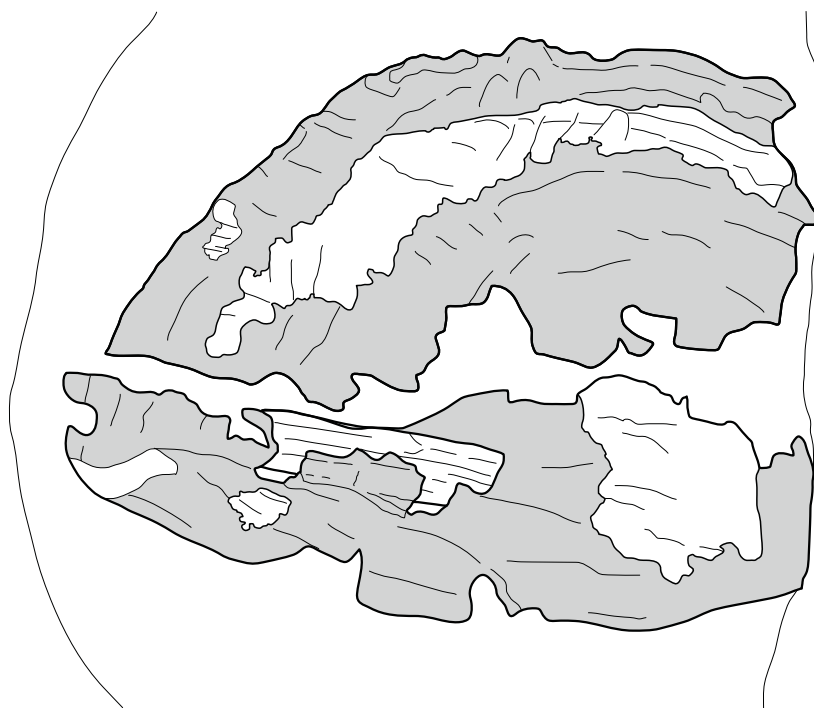


図 74 山王冢遺跡漆塗貝製品 1



1



2

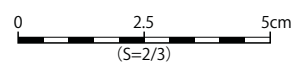


図 75 山王冢遺跡漆塗貝製品 2

第15節 漆塗貝製品 (図74・75) (図版67・68)

幅10 cm以上の大型の二枚貝に漆が塗られている資料である。4点ある。なお本研究では全体形が推測できる資料を掲載、その外面を図化した。そのほか掲載外の小片が複数ある。素材はイシガイ科とみられる淡水性の貝で、殻は消失し殻皮のみ残存する。東区3点、西区1点あり、東区は3点とも15～26層出土で大洞C2式期、西区はVI層で大洞A1式期に属す。大きさは完形品で殻長16～19 cm、殻高10～12 cmで破損品もおおよそ同じ大きさに復元できる。図74-1は保存のため和紙に裏打ちされた状態で外面のみ観察できる。半分程度が残り、外面には赤漆が全面に塗られる。図74-2は殻長16.7 cm、殻高10.4 cmを測る完形品である。左殻で外面に赤漆が全面に塗られるが、内面は赤漆が部分的に残る。図75-1も殻長18.9 cm、殻高11.2 cmを測る。図74-2と同型品で、左殻で外面に赤漆が前面に塗られるが、内面は赤漆が部分的に残る。図75-2は劣化が著しく、土壌ごと取上げられた資料である。本研究によってクリーニング、保存処理を行った。殻長12.3 cm、殻高9.3 cmが残る。殻の部位は不明である。土壌に赤色顔料が沈着し全面に赤漆が塗られていたとみられる。

(櫻庭陸央・山口沙織・植月 学・上條信彦)